

学校不適應の未然防止のためにⅡ ～小学校3・4年生（前思春期）への大切な関わり～

教育相談部

部長	山本雅哉
主任研究主事兼指導主事	服部康子
研究主事兼指導主事	吉田晴美
研究員	永尾彰子

地域教育支援部

研究主事兼指導主事	由良渉
研究主事兼指導主事	奥澤嘉久
研究員	塩見豊

要約：

本研究では、前年度の研究（山本ら, 2016）の課題から、小学校3・4年生（以下、前思春期）の子どもたちにとって教員のどのような関わりが大切であるかについて、小学校低・中・高学年の担任経験が複数回あり、教職経験13年以上の教員11名へPAC分析を用いた調査を行った。その結果、連想刺激文にある「前思春期の子どもにとって必要な体験や力」、「教員が大切にしている関わり」、「前思春期の子どもの特徴」の3つのカテゴリーについて語られた。不安や葛藤が膨らみ始める時期だからこそ、安心できる居場所の中で子どもが「大切にされているという実感」をもつことができる関わりが、子どもの成長を下支えしていることが示唆された。そうした教員の関わりは、学校不適應の未然防止の一助になると考えられた。

キーワード：前思春期、教員の関わり、PAC分析

1 問題と目的

近年、いじめや不登校、非行、暴力行為、学業不振や友人関係等、学校に関わる様々な適應の困難さ、いわゆる学校不適應を示す児童生徒が多く見られる。

京都府総合教育センター教育相談部・地域教育支援部では、学校不適應とは、学校における様々な場面への適應の困難さを示すものを指し、集団への不適應、学業不振も含めた広い概念にとらえ、平成27年度からプロジェクト研究として小学校3・4年生を対象とした「学校不適應の未然防止」に関する研究を行ってきた。

文部科学省によれば、平成27年度の長期欠席者（30日以上欠席者）のうち、不登校を理由とする児童生徒数（高等学校も含む）は約17万6,000人とされ、そのうち小学校では約2万7,600人（前年度より約1,700人の増加）、中学校では約9万8,400人（前年度より約1,400人の増加）であった。本府においても、平成27年度の小中学校（公立）の不登校児童生徒数2,535人（前年度より130人の増加）のうち小学校においては554人で、これは前年度より51人増加となった。全国的にも本府としても平成24年度から4年連続で増加していることから、不登校は学校不適應の中でも喫緊の課題である。

また、暴力行為の状況を見ても、本府では、生徒間暴力の発生件数が463件（前年度より103件の増加）で、小学校においてのみ増加している。いじめの認知件数においても、中学校、高等学校が減少しているのに対して、小学校は21,045件で、前年度より1,376件増加している状況がある。中でも、小学校3年生では前年度より612件増加し、どの学年よりも大きな増加であった。

文部科学省(2016)の報告からは、こうした様々な学校不適應の状況が小学校において顕著に現れており、問題行動の低年齢化の傾向がうかがわれる。かつては、思春期に前述の課題が表れることが多くとされてきたが、近年は社会情勢の変動、家庭環境の変化等も含めて様々な背景の影響が予想され、教育相談の臨床場面でも、思春期よりさらに早い時期の子どもに学校不適應の萌芽があると経験的に認められている。そこで本研究では、小学校3・4年生を「前思春期」と定義付け、研究を進めてきた。

平成27年度の研究(山本ら,2016)では、まず【研究1】として「前思春期にはどのような質的変化が起こるのか」を明らかにするための文献研究を、【研究2】として「学校不適應に対する意識及び発達に関する実感」について京都府内教職員を対象に調査研究を行った。

その結果、【研究1】では、知的能力・関係性・自発性・学校における社会性の発達の4観点から、前思春期における心理的課題や発達の質的変化に関する理論的な背景を踏まえ、改めて前思春期が「質的な転換期」であることが確認された。前思春期の知的能力の発達では、自分を客観視できるようになり、自分と異なる価値観があることを理解できる力が育つことが確認された。また、関係性の発達においては、同世代の中で他者の目を通して自分を見る力が育つなど、自分中心の世界から他者と関係を結ぶ世界へと変化する時期と言える。特に、社会性の発達では学校現場の役割が大きく、そこで同世代との遊びを通して自発性が培われることは、この時期の大切な発達の課題である。これは、前思春期において同世代との関わりがいかに重要であるかが示唆するものであり、そのための教職員の適切な関わりが重要であることが確認された。

【研究2】の教職員の意識調査では、学力面の個人差、友人関係の難しさ、成長過程の節目等児童生徒の発達に関する特徴が明らかになるとともに、欠席が目立ち始める学年として、小学校3・4年生に注目している実態が明らかになった。このことは、文献研究による、前思春期が大きな「質的な転換期」であるという認識と併せて、「前思春期の時期には学校不適應の萌芽がある」という本研究の仮説を裏付けるデータとなっていると考えられた。

平成27年度の研究からは、「質的な転換期」である小学校3・4年生(前思春期)の時期にこそ学校の教職員の適切な関わり的重要性が示されたが、実際に教職員はどのようにこの時期の子どもたちを捉え、どのような関わりを意識しているのか、さらに詳細な調査が必要であることが課題として残された。

そこで、平成28年度の研究では、前思春期の心理的・発達の課題を踏まえ、子どもが学校生活を送る上で、教職員のどのような関わりが大切であるかを探ることを目的とする。調査対象は小学校3・4年生を担当する教員に絞り、今を生きる小学校3・4年生(前思春期)の子どもにとってどんな体験や力が必要であるか、その力を付けるために、どのような関わりが大切であるかについて探ることとした。このことから、学校不適應の未然防止に結び付くヒントが得られるのではないかと考えられる。

2 研究方法

本研究では、昨年度の研究結果を踏まえ、小学校3・4年生を実際に担任する教員の考えや関わりについての調査のため、PAC分析を用いたインタビュー調査を実施した。今回用いたPAC分析のPACとは、Personal Attitude Construct(個人別態度構造)の略称であり、「個人別に態度構造を測定するために」開発された方法である。PAC分析では、半構造化された面接とコンピュータによる想起語間の距離測定を行い、個人ごとにテーマへの態度やイメージの構造を分析する。

はじめに、連想刺激文の検討のため、公立小学校教員1名と京都府総合教育センター（以下センター）研究主事兼指導主事1名の計2名に予備調査として聞き取り調査を行った。

その後、研究協力校（公立小学校7校）の教員11名への聞き取り調査を2016年6月から8月に行った。協力者は、以下の2つの条件を満たす教員とした。

- ① 小学校低・中・高すべての担任経験があること（ただし、中学年は3・4年生両学年の担任経験があること）
- ② 教職経験が13年以上であること

センター教育相談担当者5名が2名1組で研究協力校へ訪問し、内藤（2002）によって示されたPAC分析の手順に従って、協力者に聞き取り調査を行った。2名のうち、1名が主に質問や手順説明を行い、もう1名が記録やソフトの操作を行った。

PAC分析を用いる理由として、通常のアンケートやインタビュー調査では得られない協力者の多様な経験や感情を含む内面の構造を明らかにできる（内藤, 2002）こと、そして協力者自身が実践を振り返り、自身の考え方について新たな発見（診断的評価）をするのに有効である（内藤, 2008）ことの2点が挙げられる。

調査開始前に趣旨説明を行い、協力者はいつでも調査を中止できること、回答を拒否することができることを確認し、プライバシーと個人の権益が研究発表時に最優先されることを説明した後に、半構造化面接の形式で聞き取りを行った。

面接内容は、協力者の承諾を得た後、聞き取った過程をICレコーダーに録音し、面接終了後、逐語録に起こした。聞き取り過程は以下の通りである。

まず、テーマ（連想刺激文）を提示し、協力者によって自由連想語句または文が想起され、それぞれの重要度順位と＋、－、±のいずれかのイメージを調査協力者自身が決定した。

次に、土田（2009）のPAC-assistソフトを用いてインタビューを進め、分析ソフトはHALBAU7、距離関数はワード法を用いた。各連想項目のイメージについては、＋、－、±のいずれかを聞き取った。各クラスターの命名とイメージやクラスター間の関連性などについては、インタビューで聞き取った。連想刺激文は図1の通りである。

「3・4年生の学習面でのつまずきとは何だと思いますか。3・4年生の友人関係の難しさとは何だと思いますか。3・4年生の児童にとって、『“自分是可以”』という感覚を得ることが大切であると言われていますが、どういうところで得られると思いますか。そういったことを含めて『小学校3・4年生の児童にとって必要な体験や力』とはどんなことだと思いますか。』『そのために大事にされている関わり』はどんなことですか。」

図1 連想刺激文

3 結果と考察

本研究では、11名に対してPAC分析による調査を実施した。ここでは、そのすべてを掲載することは紙幅の都合上困難であるため、得られたデータのうちA教諭について以下に示す。

(1) A教諭のPAC分析による結果と総合的解釈

A教諭は、連想刺激文に対して自由連想から10個の項目を挙げた。図2はA教諭のデンドログラムである。図2のデンドログラムから調査者2人が3つのクラスタに分け、協力者に確認すると、同意が得られたので3つのクラスタごとに話を聞くこととした。

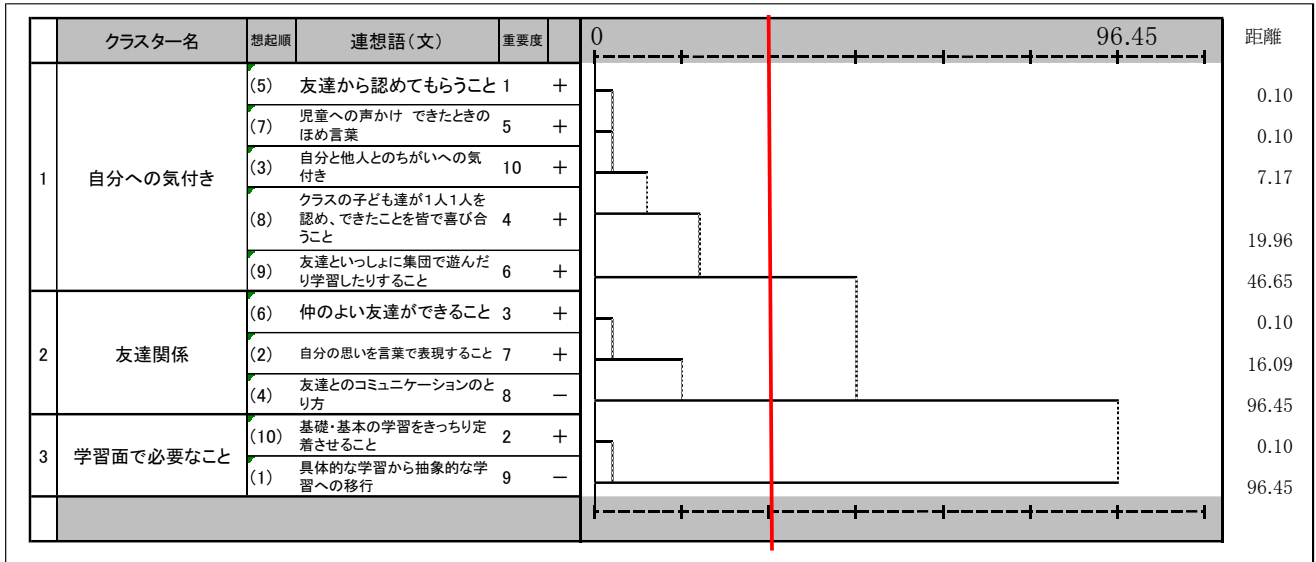


図2 A教諭のデンドログラム

ア 協力者によるクラスタのイメージと解釈

10の連想語と3つのクラスタで構成された。

【クラスタ1】

「友達から認めてもらうこと」「児童への声かけ・できたときのほめ言葉」「自分と他人とのちがいをへの気付き」「クラスの子ども達が1人1人を認め、できたことを皆で喜び合うこと」「友達といっしょに集団で遊んだり学習したりすること」の5項目：「自己肯定感とか、そこへつながる気がします。ただ自己肯定感につながる前の何かです。『自分への気付き』かな。認めてもらうこと。自分と他人との違いや気付きだから、『自分への気付き』です。」

【クラスタ2】

「仲のよい友達ができること」「自分の思いを言葉で表現すること」「友達とのコミュニケーションのとり方」の3項目：「コミュニケーション力かな。『友達関係』です。『友達関係』の築き方とか、作り方。築くとは、作って構築する感じです。『友達関係』でもいいです。」

【クラスタ3】

「基礎・基本の学習をきっちり定着させること」「具体的な学習から抽象的な学習への移行」の2項目：「学習の定着。学習面でどんな力を定着させることが必要か。『学習面で必要なこと』です。絶対必要なもの、最低限つけなければならないこと。」

イ クラスタ間の比較と全体について

【クラスタ1】と【クラスタ2】との関係について：「3・4年生は何か気付いてくる年代だと思い

ます。自分への気付きがあつて友達関係を作れる。自分はこの家の子で自分と違う家の子がいて、自分って一体何？と気付いたときに、不安になったり、親から離れていったりする。自分への気付きは大きいと思います。そういう風に3・4年生ぐらいの時に、はたと自分に気付いて、さらに友達の良いところも認められるようになる。『自分への気付き』があつての『友達関係』。1人では不安だけど、友達の中にいたら、友達のいいところを見つけたり、友達に認めてもらったりして自分が育つ。そういうことが友達の中で起こっている年代が3・4年生。仲の良い友達ができたり、何人かで遊べたり、同じ趣味をもつ子と仲良くなれたりというのが徐々に始まるのが3・4年生だと思います。」

【クラスタ1】と【クラスタ3】との関係について：「基礎基本の学習があるから、他人のことと違いがわかり、認められる。学習面も育てながら、人との違いを見つけるところでは関連がある。」

【クラスタ2】と【クラスタ3】との関係について：「学習面である程度、読みの力とか言葉の力をつけないと、友達関係が築きにくい。思ったことや自分の思いを表現することが難しい子は、やはり友達関係を築きにくい。だから、自分の思いをもつ手段として、“書くこと”が大事なのかなと、特に授業の中では感じます。」

ウ プラスイメージの聴取

【クラスタ1】は、「友達から認めてもらうこと (+)」「児童への声かけ・できたときのほめ言葉 (+)」「自分と他人とのちがいに気付き (+)」「クラスの子ども達が1人1人を認め、できたことを皆で喜び合うこと (+)」「友達といっしょに集団で遊んだり学習したりすること (+)」の5つの項目からなるクラスタである。

【クラスタ2】は、「仲のよい友達ができること (+)」「自分の思いを言葉で表現すること (+)」「友達とのコミュニケーションのとり方 (-)」の3つの項目からなるクラスタである。

【クラスタ3】は、「基礎・基本の学習をきっちり定着させること (+)」「具体的な学習から抽象的な学習への移行 (-)」の2つの項目からなるクラスタである。

エ 重要順位とプラスイメージ

10の項目のうち重要順位の高い5位までを見ると、①「友達から認めてもらうこと」、②「基礎・基本の学習をきっちり定着させること」、③「仲のよい友達ができること」、④「クラスの子ども達が1人1人を認め、できたことを皆で喜び合うこと」、⑤「児童への声かけ・できたときのほめ言葉」であった。①から⑤全てプラスイメージであった。

オ A教諭についての総合的解釈

【クラスタ1】は、「友達から認めてもらうこと」や教師による「児童への声かけ・できたときのほめ言葉」によって、子どもは“自分”というものに気付き、その『自分への気付き』が子どもの自己肯定感につながると語っており、『自分への気付き』と命名された。

【クラスタ2】は、自分の思いで言葉表現しながら、友達とコミュニケーションをとることで仲の良い友達ができ、友人関係を構築していく力が育っていくと語っており、『友達関係』と命名された。

【クラスタ3】は、小学校3・4年生（前思春期）で学習内容が「具体的な学習から抽象的な学習

へ移行」されることを踏まえ、「基礎・基本の学習をきっちり定着させること」が必要であると語っており、『学習面で必要なこと』と命名された。

全体的にみると、A教諭は小学校3・4年生（前思春期）とは、周囲のことや自分のことに「気付いてくる年代」で、特に『自分への気付き』が始まる時期であると語っている。それは小学校3・4年生（前思春期）の大きなテーマであると考えていることも推察された。『自分への気付き』があつてこそ、『友達関係』を築くことができ、友達に認められながら育っていくことが大切であることを強調している。また、基礎・基本の学習をきっちりと定着させることで、読みの力や言葉の力を伸ばし、自分の思いを表現することができるようになることは『学習面で必要なこと』と語っている。これは『友達関係』の構築や『自分への気付き』にもつながると語っていることから、3つのクラスは円環的に関連していることが推察された。

そして、A教諭は小学校3・4年生（前思春期）の担任として、前思春期に必要な力を、学級という“集団”の場で育てていくという意識をもち、学級経営を行っていることは注目すべき点である。具体的な実践として、学級の子どもたちが1人1人を認め、できたことを皆で喜び合うことや友達と一緒に集団で遊んだり学習したりすること、また、子どもが何かできた時のほめ言葉など声かけの工夫をするなど、学級を見守る担任として日常的に心がけていることが語られた。特に授業の中では、子どもたちが自分の思いをもち、それを表現するために、「書くこと」を大切にしているところも興味深い。

また、A教諭は、「具体的な学習から抽象的な学習への移行」と「友達とのコミュニケーションのとり方」の2項目だけがマイナスイメージであったことから、2項目を現在の小学校3・4年生（前思春期）の子どもの課題として捉えていることが推察された。

(2) 全協力者のPAC分析の結果と総合的解釈

A教諭と同様の方法で全協力者にインタビューを実施した結果、各協力者から出されたクラスタ名を表1に示す。それぞれの協力者の語りからは、協力者によって中心に語られる内容の違いは多少あるものの、それぞれのクラスタの内容から大きく3つのカテゴリーに分けられると考えられた。

各協力者は、連想刺激文から導かれる「小学校3・4年生の児童に必要な体験や力」と「そのために大事にしている関わり」を想起する際、その前提となる「前思春期の子どもの特徴」のイメージを想起していることがうかがえた。

前述したA教諭のインタビューでは、3つのカテゴリー全てに同数のクラスタが認められたことから、11人全体の平均的な語りとして、本論で取り上げることとした。

表1には、全協力者の挙げた全てのクラスタを3つのカテゴリーに分類した一覧として示す。

表1 各協力者のクラスタおよび内容の項目別分類

協力者 カテゴリー	前思春期の子どもの特徴	前思春期の子どもにとって 必要な体験や力	教員が大切にしている関わり
A	1. 自分への気付き	2. 友達関係	3. 学習面で必要なこと
B	1. 発達のちぐはぐさ 2. 他者との比較 3. 実体験のなさ	4. 固定観念	
C	1. 自分らしくいられる		2. 真の(本当の)リーダー 3. 子どもの思いを大事に 4. 時期をみて焦らず指導
D		1. 中学年までに身に付けておきたい力	2. 自分から意欲的に取り組むために 3. 大切にしていること
E		1. つながる 2. やり切る	3. 大切
F		2. 達成	1. 伝え合う
G		1. 学力の定着	2. 学級経営の基盤
H		1. つながる	2. 生きる基礎 3. 道徳
I	3. 中学年	2. 学習 4. 友達	1. 内面理解
J		1. 失敗を受け入れる 2. 挑戦する 3. 思いを伝える	4. 社会性
K	3. 想像力と実体験	2. 基礎学習力 4. 自分で自分の居心地の良い環境(友人関係)を作っていく力	1. 包み込まれ感

4 総合考察

本研究の目的は、子どもたちが学校生活を送る上で、教員自身は子どもたちへのどのような関わりが大切と捉えているかを探ることであった。教員の関わりについて考える際、目の前の子どもの実態についての捉えは欠かせない。実態把握に基づいて、それにふさわしい関わりが見出され、実践されていることが各協力者の語りからうかがえた。ここでは、A教諭の語りを中心にしながら、各協力者の語りの特徴を以下の3つのカテゴリーに分け、考察する。

(1) 前思春期の子どもの特徴について

A教諭は「小学校3・4年生の時期は、はたと自分に気付いてくる年代」であり、「自分への気付き

があって、友達の良いところも認められるようになる」と語り、他者とのつながりによって自分への気付きがより先鋭化されることを示唆している。また、B教諭は「自分ができないことをできる子と比べ、自分のできなさを感じる」時期であり、「他者との比較」ができる時期とも語り、友達との違いがわかってくる時期であることを指摘する協力者は多かった。このことは、山本ら（2016）の前思春期に関する文献研究で、「学級という集団において自分の視点だけでなく、他者の視点をも得ることで、自分を客観視でき始める」と再確認されたことと重なるところである。他者と比較し、自分を客観視できるということから、少なからず子どもたちが同世代集団の中で日々葛藤を抱えながら過ごしていることが推察される。

さらに、A教諭は、「自分とは違う家の子」がいることを理解し、「自分って一体何？と気付いた時に、不安」になる、自分についてこれまで考えなかったことに「はたと気付く」ことで生まれる不安についても語っている。大山（2015）は、「前思春期には、第2の『私』の目覚めとでもいえる自我体験が生じる。自我体験とは一言で言えば、『私は他でもない私である』『いや本当に私なのか』『なぜ私なのか』という、強烈な感覚が生じる体験である。」と述べている。そして「自我体験においては、それまで当たり前であった日常生活に、突然切れ目が入る。（中略）日常の自明性に破れが生じる体験である。同時にそれは、他でもない自分自身の存在に対する強烈な感覚としても表れてくる」とも述べている。つまり、一見、小学校3・4年生の時期は、小学校6年間の中間であり表面的には安定しているように見える時期であるが、こうした内面の変化が生じることから、発展途上である自我が大きく揺るがされ、不安や葛藤が生じやすい時期であることが協力者の体験的にも述べられたと言えよう。

また、これまで関わってきた前思春期の子どもの特徴として、各協力者から「実体験のなさ」や「想像力の不足」を指摘する声、発達アンバランスさについて指摘する声も挙げられた。これは、子ども自身の課題ばかりでなく、親子関係や家族構成の変化、地域とのつながりの希薄さを含め、社会全体の変化等様々な要因が影響していることも考えられる。その上、この時期、学習容量が一段と増加することも加わり、個人の差がより顕著に現れてくることも推察された。こうしたことから、学習面や友達関係等うまく乗り越えられない状況に直面した子どもの中には、劣等感を抱き、様々な形で不適応に陥る場合があることは想像に難くない。

（2）前思春期の子どもにとって必要な体験や力について～「つながる」ことの重要性～

今回、協力者の多くは連想刺激文の影響もあり、前思春期のテーマともいえる同世代とのつながり、友達関係について触れている。A教諭は、「仲の良い友達ができること」はこの時期に大切なことであり、1人では不安でも、友達の中で過ごすことによって、友達に認めてもらい、「自分が育っていく」時期だとも語っている。前述したように、この時期の子どもたちは、不安や葛藤が生じる内的に揺れの大きい時期であることから、友達関係や学級という集団において理解し合えるあたたかい人間関係を必要とするとも考えられる。その中で、自分が受け入れられる体験が、安心して学ぶことや主体的な活動を支え、人と関わろうとする力につながっていくとも想像できる。大山（2015）は、「前思春期は、子どもがそれまでの親や先生といった縦のつながりから、友人関係といった横のつながりに移行する時でもある」と述べ、この時期における友達とのつながりの重要性を示唆している。特に、前思春期に「仲の良い友達ができ、同じ趣味をもつ友達と仲良くなる」経験は、まさに、チャムシップができる体験とも言え、この親密な友達関係を築けることこそ、その後の人間関係の安定につなが

ると考えられた。

また、友達関係の中で「自分の思いを言葉で表現する」力が必要であると語っている。それは、相手に嫌だ、困るといった簡単な意思表示をすることはもちろん、こうしたいという自分の主体的な思いを伝えることも含め、直接的なコミュニケーション力を身に付けておくことである。この時期に体験的に身に付けておくことは、当然ながら5・6年生へもつながり、さらには、友達関係だけに留まらず、広く人と関わる上での態度や伝え方などのコミュニケーションスキルにもつながると考えられる。

(3) 教員が大切にしている関わりについて

各協力者は、友達と一緒に遊んだり、意見を交わしたりすることなど「つながる」体験が必要であるからこそ、「伝え合う」場を設けたり、「子どもの思いを大切にしたい」取組を意識して学級づくりに取り組んでいることが明らかになった。そして、A教諭をはじめ多くの協力者の回答から、基礎基本の学習を定着させるなど「学習面で必要なこと」は、学校生活の多くを占める授業の場面で育てていくが、それは友達とのつながりを意識した学級経営を基盤とした集団の場を通して実践していると語られた。特に、個々の話をしっかり聴く、一人の係活動も認めるなど、一人一人の思いを大切にしたい関わりやトラブルが起こった際にも仲介に入りすぎず、子どもの力を信じ任せるといった姿勢を意識していることも明らかになった。一方で、最後までやり切れるよう適度なアドバイスをして見守ったり、いっしょに考えたりするなど、失敗しても大丈夫という雰囲気づくりを心がけているとの回答が見られたことも注目すべき点であろう。

こうした教員の関わりは、互いに理解し、許し許される学級の雰囲気を作り、子どもが安心できる居場所の保障になっていると考えられる。角田(2009)は、『読み・書き・算数』といった学問的な習得はもちろん大事ですが、『他人を理解すること、愛すること、自分を尊重すること』の方が人格形成の上では重要です。子どもの心の中で健全な自尊感情が育つことが、他人を大切にしたい思いを育み、さらに学習への意欲も高めていきます。個性の違いを把握しながら、一人ひとりのこどもについて理解を深めていくことが、何よりも教師には求められると言えます。関心をもった大人にきちんと関わってもらいたい体験が、子どもの自尊感情の育成には欠かせません」と述べている。協力者の中で語られた「大切にされているという実感」を子どもたちがもてるような関わりこそが、子どもたちが安心して成長できることを下支えしていることが示唆された。

前思春期の子どもの特徴を理解した上で、個々の心の動きを敏感に感じ取り、今だけにとどまらない先へとつながる子どもの将来を見据えた教員の日々の関わりこそが、子どもの学校不適応の未然防止の一助となるのではないかと考えられる。

5 本研究の成果と課題

本研究では、A教諭の語りを中心に述べたが、他の協力者の語りもおおよそ「前思春期の子どもの特徴」、その時期に「必要な体験や力」、そのために「大切にしている教員の関わり」という大きな3つのカテゴリーにまとめられることがわかった。しかし、さらに詳細に各協力者の語りの全体像を明らかにし、各カテゴリー間の構造を分析する必要があると考えられる。以上を今後の課題としたい。

6 参考・引用文献

- 文部科学省 (2016). 平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(確定値) について
- 山本雅哉ら (2016). 学校不適応の未然防止のために ～ 小学校 3・4 年生 (前思春期) という時期とは ～ 京都府教育委員会
- 内藤哲雄 (2002). P A C 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸太一編 (2008). P A C 分析研究・実践集 1 ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄・井上孝代・いとうたけひこ・岸太一 (2011). P A C 分析研究・実践集 2 ナカニシヤ出版
- 土田義郎 (2009). 認知構造の分析法の比較 評価グリッド法と P A C 分析, 日本建築学会 2002 年度大会 (北陸) 学術講演梗概集, 2002 (D-1), 845-846, 2002-2009.
- 大山泰宏 (2015). 改訂新版人格心理学 一般財団法人放送大学教育振興会
- 角田豊編著 片山紀子・内田利広著 (2009). 生徒指導と教育相談 父性・母性の両面を生かす生徒指導力 創元社

謝辞

本研究を行うにあたり、インタビュー調査に協力をいただいた協力者の皆様に感謝いたしますとともに、御指導や御助言をいただいた京都橘大学教授 菅佐和子先生、京都教育大学教授 小松貴弘先生に深く感謝申し上げます。